

中国・朝鮮から漢字が伝わって以後、漢字を使って言葉を記すことが始まります。漢字から万葉仮名が、万葉仮名から片仮名・平仮名が生まれ、特に平仮名は、平安時代における和歌や物語の発達を支えました。その後江戸時代にかけて、日本の古典文学は、口承をも媒介にしつつ、和歌・連歌・俳諧・歌謡・説話・物語・小説・日記・随筆・演劇・漢詩文など、さまざまな形式で展開してゆきます。

国文学研究資料館では、上代から近代（明治時代初期）までの文学を書物（古典籍）によってたどる、通常展示「書物で見る日本古典文学史」を毎年開催しています。本冊子はその展示の概要を収録したもので、教科書でなじみの深い作品を中心に据えて、文学史の流れを示しました。ささやかながら、日本古典文学の豊かな世界への手引きとなることを願っています。

書物で 見る 日本 古典文学史

History of classical Japanese literature seen from old rare books



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館

National Institute of Japanese Literature

〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3

TEL 050-5533-2910 <http://www.nijl.ac.jp/>

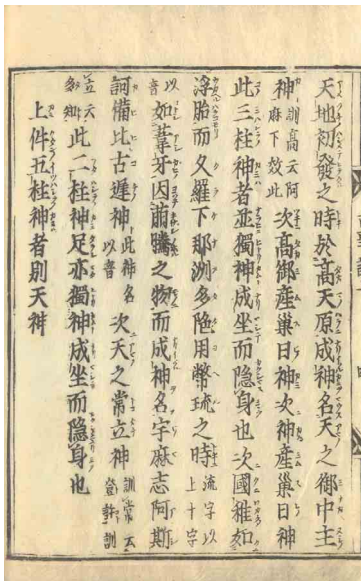
上代

日本史では「古代」という言葉が多く用いられますが、文学史では、平安時代より前を「上代」と呼ぶのが一般的です。その始まりは定かではありませんが、終わりの線は八世紀末に引かれます。政治的には国家が統一と制度の完成に向かった時代であり、文学との関わりで言えば、文字を持たなかった日本人が漢字という文字と出会い、漢字を使って表現する行為を、さまざまな形で試みていった時代です。

奈良時代以前の文学

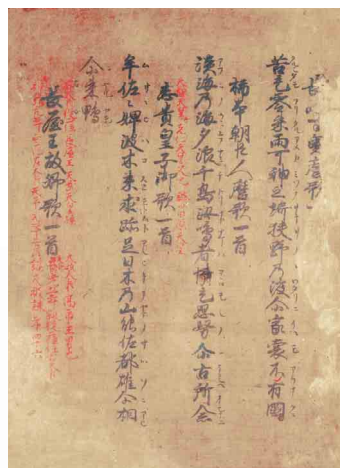
延暦十三年（七九四）、都が平安京に遷るまでの、主に大和に都があった時代の文学。神話・伝説・歌謡・和歌・漢詩文・伝記・歴史・地誌などにわたりますが、全体の著作数は多くありません。また、内容は古い時代のもを含んでいても、現存するもののうち、著作としてまとめられたのは、いずれも奈良時代（七一〇～七九四）で、国家の体制の整備を背景に成立したものが目に付きます。

古事記 和銅五年（七二二）成立。稗田阿礼が伝承していた古代の歴史を、太安万侶が筆録編集したもので、神代から推古天皇（在位五九三～六二九）までを収めている。



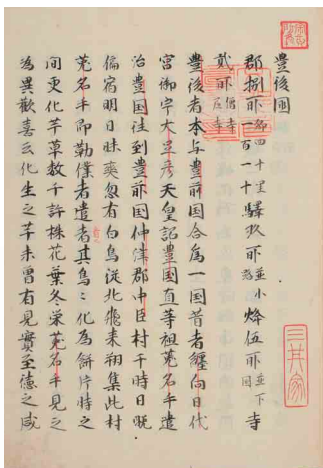
寛永21年(1644)刊

万葉集 作品の年代は舒明朝（六二九～六四二）から天平宝字三年（七五九）にわたり、約四五〇〇首を収める。何次かの編集段階を経て、奈良時代の末頃に成立したと考えられている。



鎌倉時代写 柘枝切

豊後国風土記 『風土記』は和銅六年（七一三）に元明天皇が諸国に撰進を命じた地誌で、常陸・播磨・出雲・豊後・肥前の五箇国のものが現存。地理や物産のほか、地名起源伝承を記録する。



江戸時代後期写

日本文学史年表

◆原則として、年紀は成立年を示したが、近世の一部の書目は刊年を示したものもある。
◆太字の書目は、図版掲載書目を示す。

上代

西暦

事項

*印は推定、()内は作者撰者

古事記(太安万侶)

*播磨国風土記

日本書紀(舎人親王ら)

*常陸国風土記

出雲国風土記

*豊後国風土記

懷風藻

*万葉集

歌經標式(藤原浜成)

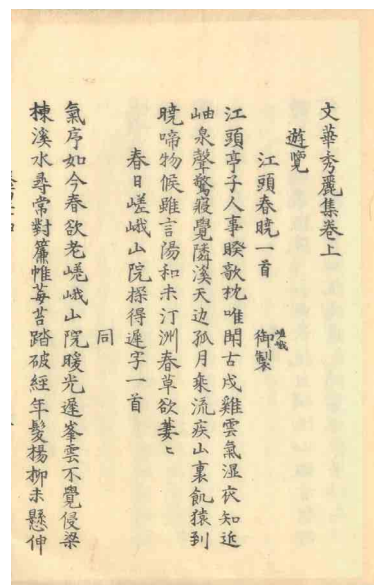
奈良時代

中古

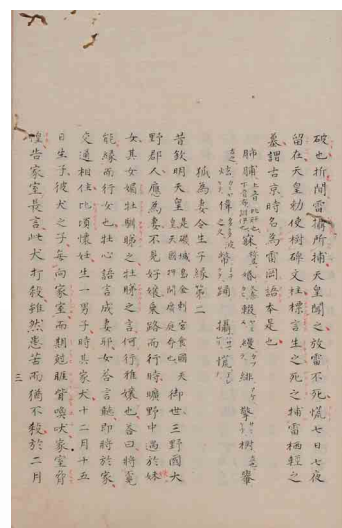
文学史では、平安時代を「中古」と呼びます。都が平安京に遷ってから、鎌倉幕府が成立するまでの約四〇〇年間で、ほぼ一〇〇年ごとに、初期・中期・後期・末期（院政期）に分けるのが一般的です。この時代は、天皇を中心とする貴族階級の人々が文学の主要な担い手でした。政治のおおよその形態により、天皇親政の初期、摂関政治の中期から後期、院政期に区分して、文学の変遷を見てゆきます。

平安時代初期の文学

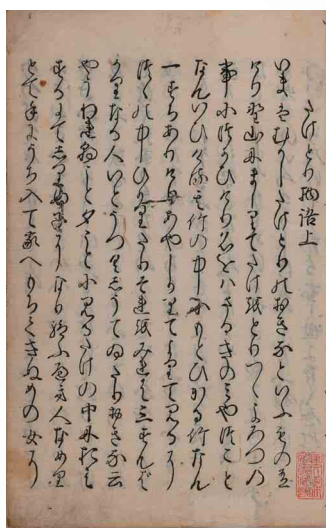
桓武天皇の延暦十三年（七九四）の平安京遷都から、宇多天皇の寛平年間（八八九〜八九八）頃までの、約一〇〇年間の文学。公的な文学として漢詩文が重んじられ、和歌はその陰に隠れた形になりましたが、日常的には和歌が変わらず詠まれています。なお、新しいジャンルとして、物語と説話集が現れたことは特筆されます。



江戸時代末期刊 群書類従



寛政10年(1798)写



江戸時代初期刊 古活字本

竹取物語 竹取の翁が竹の中から見つけて育てたかくや姫が、美しく成長した後、貴公子たちの求婚を難題によって退け、八月十五日に月の世界に帰って行くという伝奇的な物語。

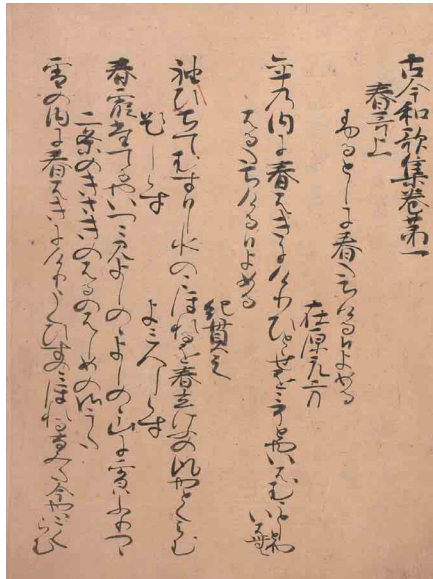
日本霊異記 薬師寺の僧景戒によって弘仁十三年（八二二）頃編まれた説話集。雄略天皇から嵯峨天皇（在位八〇九〜八二二）の時代までの因果応報説話と霊験説話一六話を、ほぼ年代順に収める。

平安時代初期				中古			
八二七	八二二	八一八	八一四	八〇七	七九七		
経国集（良岑安世ら）	* 文鏡秘府論（空海） * 日本霊異記（景戒）	文華秀麗集（藤原冬嗣ら）	凌雲集（小野岑守ら）	古語拾遺（斎部広成）	続日本紀		
八九三	八九四						
新撰万葉集	句題和歌（大江千里）						

平安時代中期～後期の文学

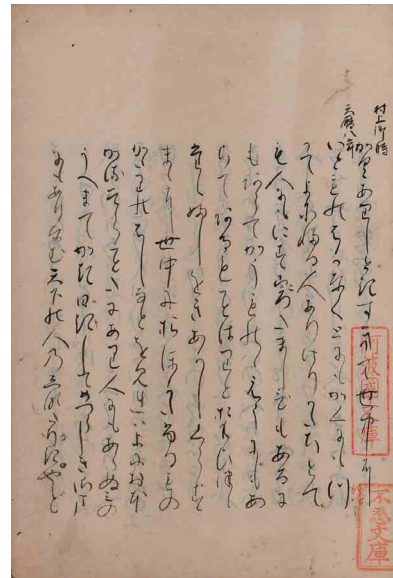
醍醐天皇の昌泰年間（八九八～九〇二）頃から、十一世紀の末頃までの、約二〇〇年間の文学。『古今和歌集』の撰集を機に和歌が公的な位置を確立し、物語文学の代表作『源氏物語』が書かれるなど、王朝文学の最盛期といえる時代です。日記や随筆、軍記といった新たなジャンルも登場しました。和歌・物語・日記が盛んになった背景に、平仮名の普及があつたことも忘れることはできません。

古今和歌集 醍醐天皇の命によって紀友則らが撰した、最初の勅撰和歌集。延喜五年（九〇五）頃成立。一一〇〇首あまりを収める。和歌の規範とされ、後代への影響も大きい。



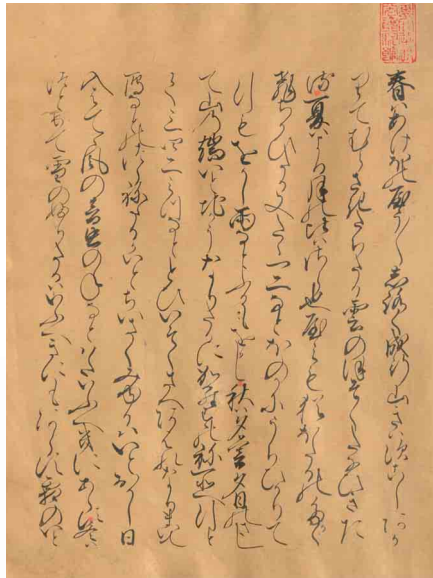
永正16年(1519)写

蜻蛉日記 藤原道綱母の仮名文の日記で、天曆八年（九五四）～天延二年（九七四）にわたる。藤原兼家との結婚生活に伴う日々の想念が描かれている。



江戸時代前期写

枕草子 清少納言作。一条天皇の中宮定子に仕える女房としての生活を背景に、さまざまな事物についての思念や日記的記事を筆録し、随筆という文学形式を確立した。

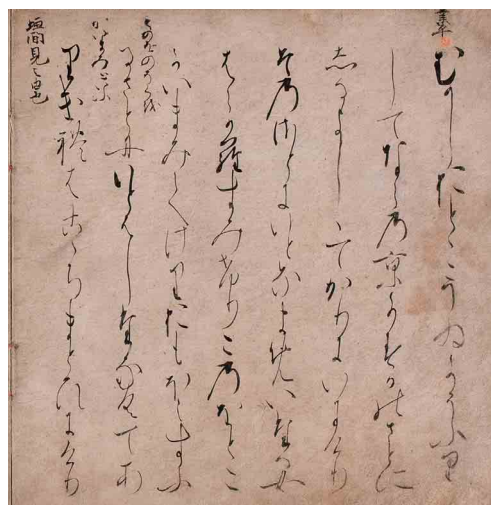


江戸時代前期写

平安時代中期

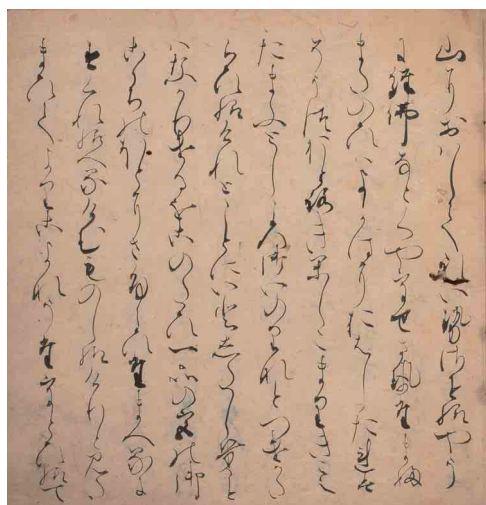
西暦	事項	*印は推定（）内は作者・撰者
九〇〇	菅家文草（菅原道真）	
九〇五	*竹取物語	
九〇五	*古今和歌集（紀友則ら）	
九三五	*土佐日記（紀貫之）	
九四〇	*将門記	
九五一	後撰和歌集（源順ら）	
	*大和物語	
	*平中物語	
九七四	*蜻蛉日記（藤原道綱母）	
	*伊勢物語	
	*宇津保物語	
九八四	三宝絵（源為憲）	
九八五	往生要集（源信）	
	*日本往生極楽記（慶滋保胤）	
	*落窪物語	

伊勢物語 全一二〇あまりの章段から成る歌物語。在原業平と思しき主人公の恋愛・交友などを描く。複数の段階を経て、十世紀後半に成立か。



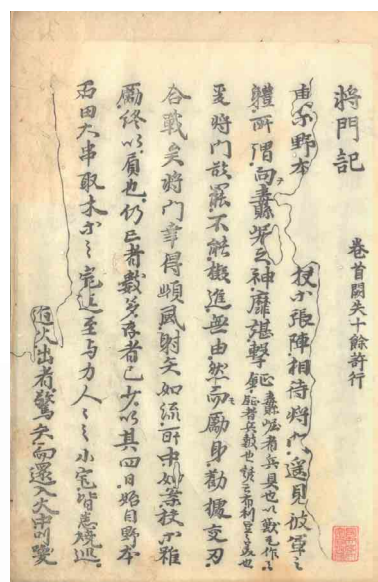
鎌倉時代写

源氏物語 紫式部作の長編物語。全五四巻。三部に分けて考えられ、第一部と第二部は美貌の貴公子光源氏、第三部は光源氏の子薫を中心人物とする。十一世紀初頭の成立。



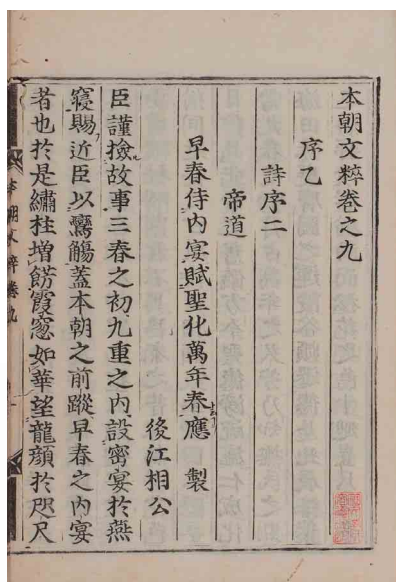
鎌倉時代写

将門記 関東の平将門の承平・天慶の乱（九三五）九四〇）を題材に、合戦とそれが起こるに至った経緯を叙述する。変体漢文で書かれ、乱後まもなくの成立と考えられている。



江戸時代後期刊

本朝文粹 文人貴族の間で漢詩文が盛んに作られたことを背景に、いくつかの撰集が編まれた。『本朝文粹』は藤原明衡撰、賦・序など各種の文体の作品四二七編を収める。十一世紀中頃の成立。



寛永6年(1629)刊 古活字本

平安時代後期

一〇〇一 *枕草子(清少納言)

一〇〇七 *和泉式部日記

一〇〇八 *源氏物語(紫式部)

一〇一〇 *拾遺和歌集(花山院か)

一〇一〇 *紫式部日記

一〇一三 *和漢朗詠集(藤原公任)

一〇二七 *和泉式部集

一〇三〇 *栄花物語 正編

一〇五五 堤中納言物語(一部成立)

一〇五八 *本朝文粹(藤原明衡)

一〇六〇 *更級日記(菅原孝標女)

*夜の寝覚(菅原孝標女か)

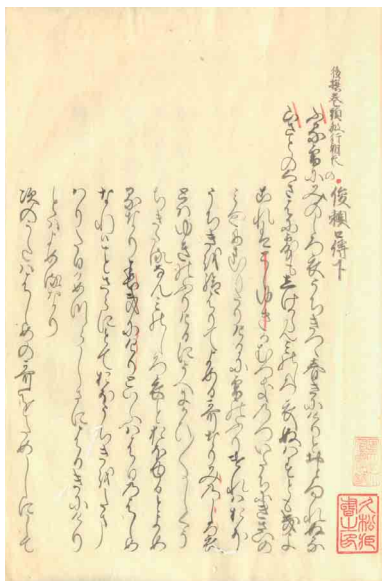
*狭衣物語

一〇六二 *陸奥話記

一〇七三 成尋阿闍梨母集

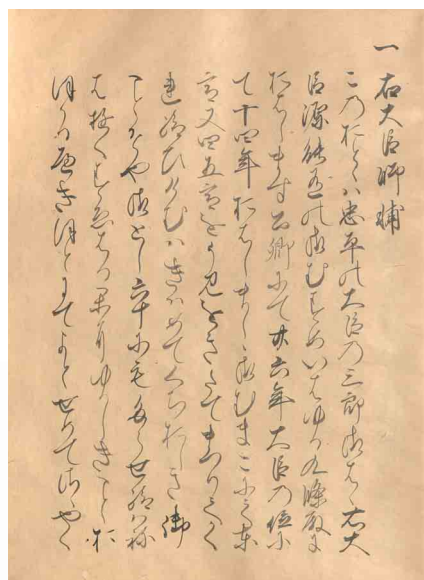
院政期の文学

十一世紀の末から十二世紀の末までの、ほぼ一〇〇年間の文学。白河院の院政が始まった応徳三年（一〇八六）と、鎌倉幕府が開かれた文治元年（一一八五）が、それぞれ始期と終期の目安になります。平安時代と鎌倉時代の橋渡しをした時期に当たり、中世文学の胎動期と位置付けることができます。



江戸時代前期写

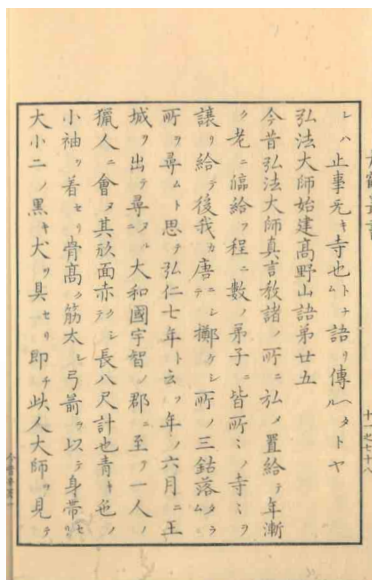
大鏡 古老の昔語りの形式で嘉祥三年（八五〇）から万寿二年（一〇二五）までを載せる歴史物語で、独自の批判的視点に特色がある。白河院政期頃の成立と考える説が多い。



江戸時代前期写

俊賴髓脳 院政期には歌学書・歌論書が多数著作された。源俊賴の『俊賴髓脳』は天永二年（一一一一）〜永久三年（一一一五）頃の成立、歌体・題詠・秀歌などの論や和歌説話を記載する。

今昔物語集 天然（インド）・震旦（中国）・本朝（日本）にわたり、一〇〇〇余話の説話を全三十一巻に収める。説話集として最大の規模を持つ。一一二〇〜四〇年頃の成立と推定される。



嘉永4年(1851)刊 丹鶴叢書

院政期

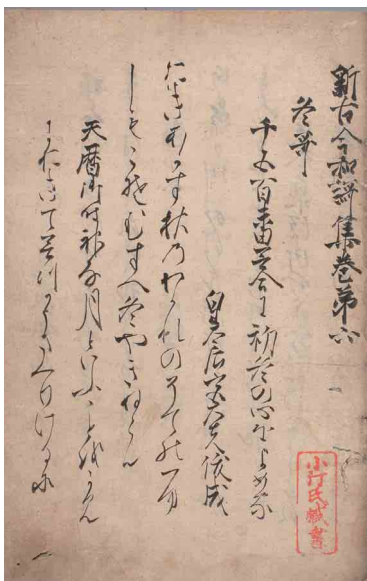
西暦	事項	
一〇八六	後拾遺和歌集(藤原通俊)	
	*とりかへばや物語	
一一〇八	*讃岐典侍日記	
	*江談抄(大江匡房)	
一一一四	*俊賴髓脳(源俊賴)	
一一一九	*新撰朗詠集(藤原基俊)	
一一二〇	*今昔物語集	
	*大鏡	
一二二七	金葉和歌集(源俊賴)	
	*詞花和歌集(藤原顯輔)	
一二五八	*袋草紙(藤原清輔)	
一二七〇	今鏡	
一二七八	*長秋詠藻(藤原俊成)	
	*梁塵秘抄(後白河法皇)	
一二七九	*宝物集(平康賴)	

中世

中世は、十二世紀末から十六世紀までの約四百年間を指します。それまで権力を握っていた貴族や寺社勢力に加え、新たに武士が力を伸ばした時代です。政治の実権が武士へ移行した鎌倉時代に始まり、天皇が巻き返しを図り混乱した南北朝時代、再び武家の政権となった室町時代を経て、下克上の安土桃山時代に至るまで、不安定な政局と度重なる戦は文学にも多大な影響を与えました。

鎌倉・南北朝時代の文学

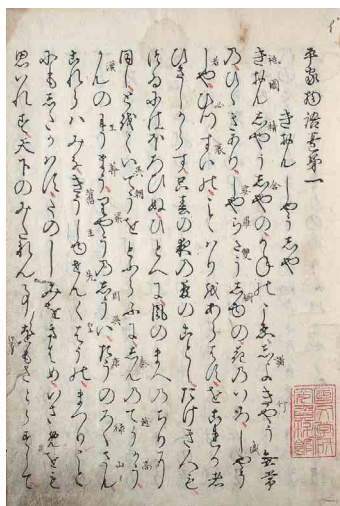
文治元年（一一八五）、鎌倉に幕府が開かれると、東国は存在感を増し、文学にも影響を及ぼします。地方や民衆を描いた説話文学が発展し、旅を素材とした紀行文学も生まれました。戦乱は、京の文化を地方に広げるとともに、現実社会への批判や歴史への関心を高め、軍記や史論が盛んに作られます。不安な日常から人々は救いを求め、仏の教えを説いた法語や無常観を根拠とした隠遁者の文学が誕生します。



鎌倉時代写 伝藤原為家筆

新古今和歌集 後鳥羽院の命による勅撰和歌集。藤原俊成の幽玄とその子定家の有心という美的理念に裏付けられた歌風は、新古今調として和歌史に一時代を画した。

平家物語 平氏の勃興から滅亡までを描いた軍記物語の一大巨編。十三世紀初めには原形が成立、語り書写されるうちに増補や改訂がなされ、種々の本文をもつ異本が現れた。



寛永元年(1624)刊 古活字本

十六夜日記

鎌倉時代中期の紀行文。藤原為家の後妻阿仏尼が、実子為相と先妻の子為氏の間で生じた所領争いのため、京から鎌倉に下向する様子を綴る。



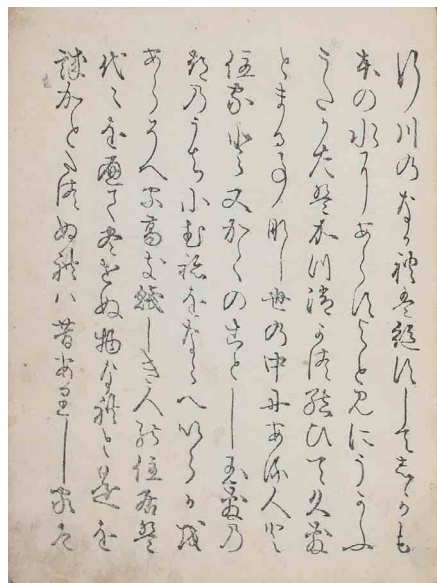
江戸時代初期写 淡彩絵入り

鎌倉・南北朝時代

中世

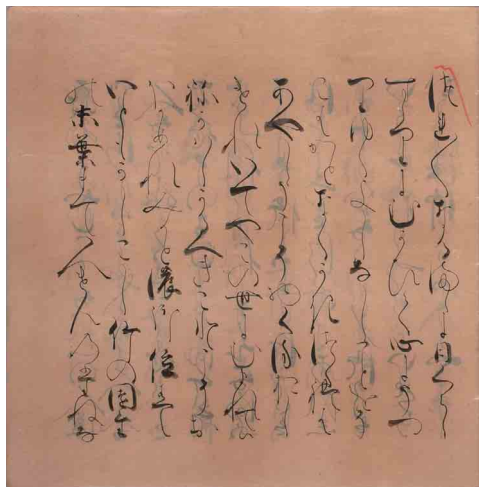
一一八八	千載和歌集(藤原俊成)
一一九三	*山家集(西行)
	六百番歌合
	*水鏡
一二九七	古来風体抄(藤原俊成)
一二〇一	*無名草子
一二〇三	千五百番歌合
一二〇五	新古今和歌集(藤原定家ら)
一二〇九	近代秀歌(藤原定家)
一二一一	*無名抄(鴨長明)
一二一二	方丈記(鴨長明)
一二二三	金槐和歌集(源実朝)
一二二五	*古事談(源頭兼)
	*発心集(鴨長明)
一二三〇	愚管抄(慈円)

方丈記 鎌倉時代初期の随筆。鴨長明著。仏教の無常観を基調に、天変地異の続く平安時代末期の混乱した世相や、日野山に閑居した方丈の庵での生活を描く。



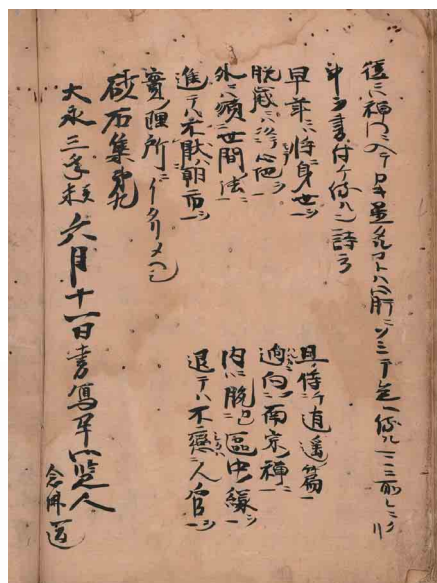
江戸時代初期刊 古活字本(嵯峨本)

徒然草 鎌倉時代末期の随筆。兼好著。題名は序段冒頭の語による。無常観に基づく人生観や世相観、美意識を特長とし、長明の『方丈記』とともに隠者文学の双璧とされる。



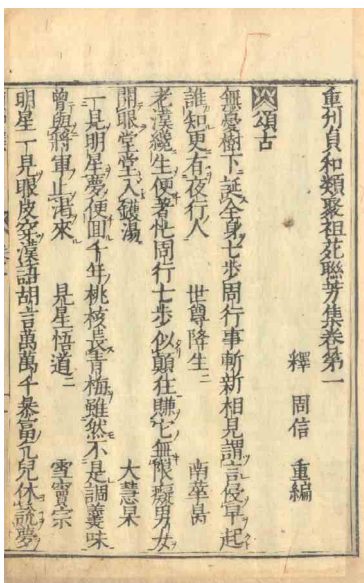
江戸時代初期写

沙石集 鎌倉時代の仏教説話集。無住の編著。通俗的な例話をもとに仏法の趣旨を巧みに説いたもので、和歌説話や笑話、動物説話など多彩な内容に特色がある。



大永3年(1523)写

貞和類聚祖苑聯芳集 南北朝時代の臨済僧義堂周信が諸祖師の偈頌を集め分類したもの。周信は夢窓疎石に師事、足利義満の参禅を指導し、五山の正統的な学風を伝えた。



江戸時代初期刊

鎌倉・南北朝時代

西暦	事項	
一一二〇	*宇治拾遺物語	
一一二三	*海道記	
一一三五	新勅撰和歌集(藤原定家)	
	*小倉百人一首(藤原定家)	
一一四〇	*保元物語	
	*平治物語	
	*平家物語	
一一四二	*東関紀行	
一一五二	十訓抄	
一一五四	古今著聞集(橋成季)	
一一六〇	立正安国論(日蓮)	
一一六五	続古今和歌集(藤原為家)	
一一八〇	*十六夜日記(阿仏尼)	
一一八三	沙石集(無住)	
一二九六	*宴曲集(明空)	
一三一一	*とはすがたり(後深草院二条)	
一三三一	*徒然草(兼好)	

室町・安土桃山時代の文学

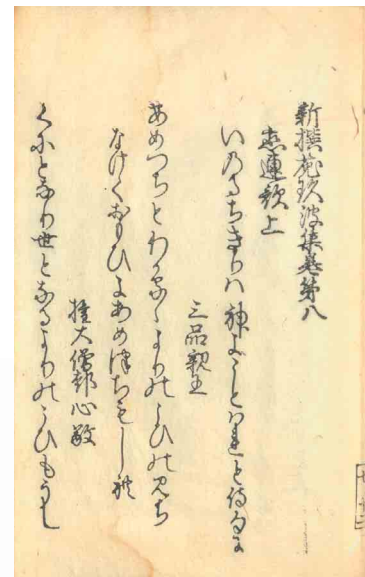
長く続いた内乱も、三代將軍足利義満の頃には次第に収まり、明徳三年（一三九二）、南北朝の合一が実現します。文学は芸能と融合し、享受層を拡大します。和歌の余技として始まった連歌は庶民にも広まり、民衆の芸能であった能・狂言は貴族や武士にも愛好されました。民衆や異類などを積極的に取り込んだお伽草子が作られ、町衆の思いをうたった小歌も流行します。文学・芸能の成立や受容の場で、庶民が大きな影響力を持つに至ります。



江戸時代前期写

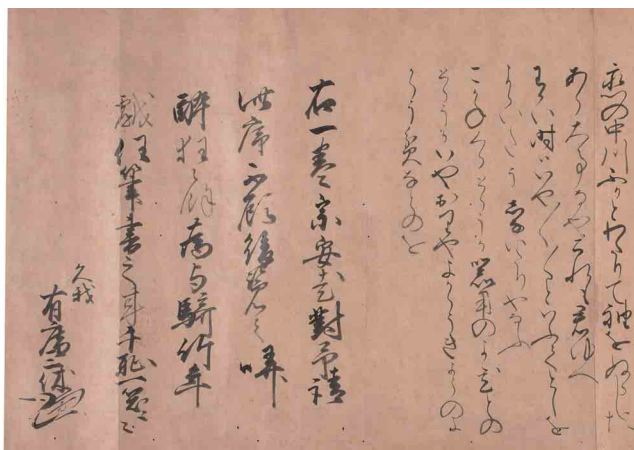
正徹物語 室町時代前期の歌僧正徹の歌論書。歌人の逸話や歌学知識、歌作の心得などを随筆風に記す。新古今調への復帰を主張し、藤原定家への尊崇がうかがえる。

新撰菟玖波集 室町時代中期の連歌撰集。宗祇らの撰。心敬や宗御などの発句や付句、約二〇〇〇句を集め、連歌がもつとも洗練された時期の撰集とされる。



江戸時代前期刊 古活字覆刻整版本

宗安小歌集 閑吟集につぐ中世小歌の集成で、安土桃山時代の成立。沙弥宗安編、久我有庵の清書。全二二〇首のうち恋の歌が大部分を占める。他に伝本を聞かず、貴重。



安土桃山時代写

南北朝・室町時代

一三三九 神皇正統記(北畠親房)

*貞和類聚祖苑聯芳集(義堂周信)

一三五七 菟玖波集(二条良基)

一三六四 *筑波問答(二条良基)

一三七二 連歌新式(二条良基)

一三七六 *増鏡

*太平記

*曾我物語

*義経記

*空華集(義堂周信)

*この頃以降、お伽草子

*風姿花伝(世阿弥)

*蕉堅藁(絶海中津)

一四二四 花鏡(世阿弥)

一四三〇 申楽談義(世阿弥)

*班女(世阿弥)

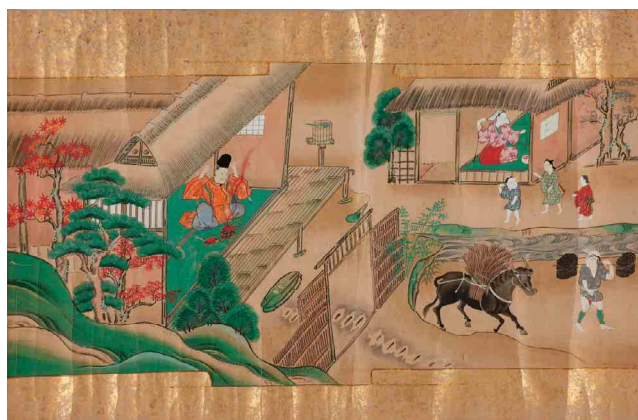
一四三九 新続古今和歌集(飛鳥井雅世)

*三国伝記

一四五〇 *正徹物語

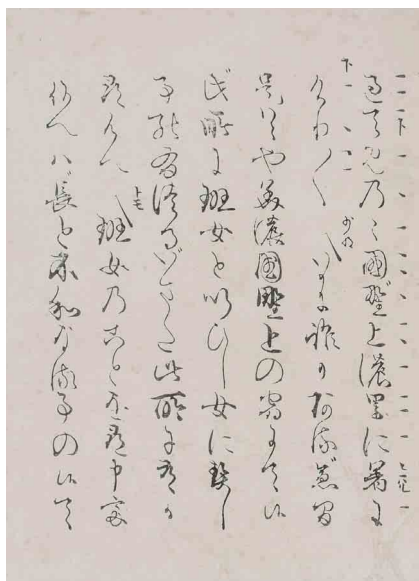
一四六三 ささめごと(心敬)

浦島 室町時代から江戸時代前期にかけて作られたお伽草子のひとつ。上代の浦島伝説によりながら、亀の報恩や浦島明神として祀られるなど中世的な変容をみせる。



江戸時代中期写 濃彩絵巻

班女 室町時代前期に能を大成した世阿弥の作。狂女物の慶長期（一五九六～一六一五）には光悦流の書風で、能の詞章に節付を示した観世流の謡本が刊行された。



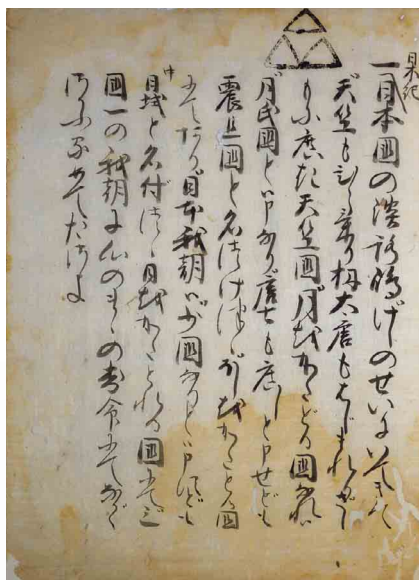
江戸時代初期刊 古活字本(嵯峨本)

曾我物語 室町時代中期頃までに成立した軍記物語。曾我兄弟による仇討ちの物語で、その悲劇性が人々の心をとりえ、芸能や絵画などに展開し、後世まで長く語り継がれた。



〔元和寛永(1615～45)〕刊 古活字本・絵入り

幸若歌謡集 室町時代後期に流行した芸能である幸若舞の詞章から歌謡を抜き出したもの。幸若舞曲は戦国時代の武將に愛好され、絵巻や屏風としても親しまれた。



慶長12年(1607)写

室町・安土桃山時代

西暦	事項	*印は推定（）内は作者・撰者
一四六七	吾妻問答(宗祇)	
一四八八	水無瀬三吟百韻(宗祇ら)	
一四九五	新撰菟玖波集(宗祇ら)	
一四九九	竹馬狂吟集	
一五一八	*閑吟集	
一五三〇	*宗長手記	
一五三二	*犬筑波集(山崎宗鑑)	
一五四〇	守武千句(荒木田守武)	
一五七八	天正狂言本	
一五九三	*天草版伊曾保物語	
	*隆達小歌	
	*宗安小歌集(沙弥宗安)	
	*幸若歌謡集	
一五九九	ぎやどぺかどる	

近世

近世は、十七世紀初頭から十九世紀後半までの約二七〇年間を指します。それまでの写本の時代から刊本の時代へと移ったこと（出版文化の普及）が最大の特徴です。文学の享受層は多岐に亘って大衆化し、漢詩・和歌といった伝統的な雅文学から俳諧・小説・芸能などの俗文学に至るまで、多彩に展開しました。前期は上方中心、徐々に文運東漸して、後期は江戸が中心となりました。

江戸時代前期の文学

幕初から元禄あたりまで（一六〇三～一七〇四）、おおむね十七世紀を「前期」と捉えます。整版本の普及によって古典が広く継承されると、今度はそこに同時代の文芸が花開きます。京・大坂などの上方を中心として公家と武家が文化を領導する一方で、徐々に町人も台頭し、元禄期（一六八八～一七〇四）には松尾芭蕉・井原西鶴・近松門左衛門らが華々しい活躍を見せました。

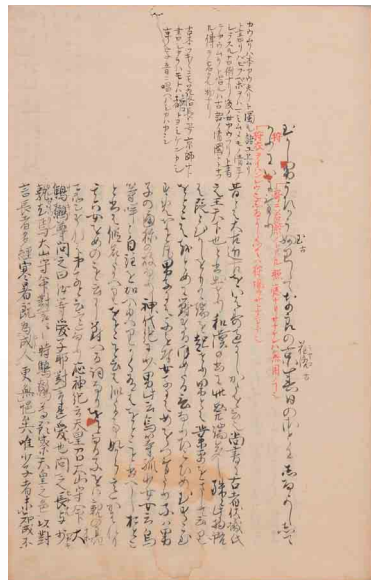
古義先生詩文集 古義学の創始者伊藤仁斎の詩文集。文集六卷・詩集二卷。仁斎十三回忌に長男の東涯によって刊行された。古義堂蔵版。板本は天理図書館古義堂文庫に現存。

先府君古學先生行狀

子長胤 謹譯

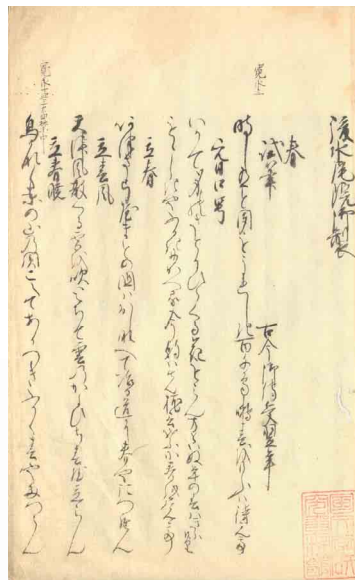
先君子諱維禰字源佐初名維貞字源吉幼名源七姓伊藤氏其先世住泉州堺津高祖道慶諱某妣某氏曾祖了雪諱某妣某氏祖了慶府君諱長之妣榎本氏空心居士直治之女久保氏大原人某之女府君本姓長澤氏居于攝州尼崎養于曾祖君之家遂冒伊藤氏元龜天正間攝東一州之間大亂閭里弗靖遂遷京師住近衛南堀河東街廢著作家考了室府君諱長勝字七右衛門妣壽玄孺八里村氏法服

享保2年(1717)刊



江戸時代後期写

勢語臆断 大坂の国学者契沖による『伊勢物語』の注釈書。元禄五年（一六九二）頃の成立。それまでのいわゆる旧注をこえて、実証的・客観的態度で全注を施している。



江戸時代後期写

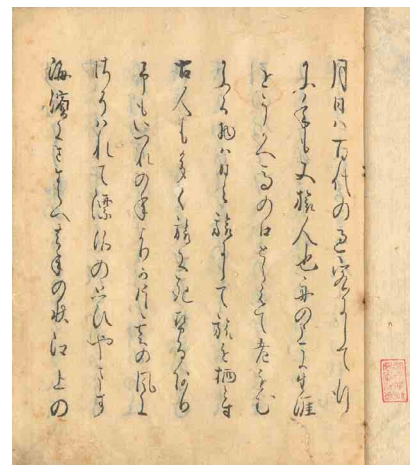
後水尾院御集 後水尾天皇の家集。鷗巢集とも。百を超える伝本があり、江戸時代において典範と仰がれた。代表的伝本は一四二六首を収める国立公文書館内閣文庫蔵本。

江戸時代前期

近世

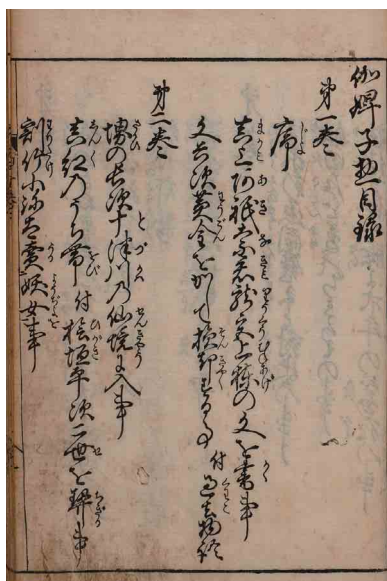
一六〇三	日葡辞書
一六〇四	徒然草寿命院抄
一六二二	信長記(小瀬甫庵)
一六二三	醒醉笑(安楽庵策伝)
一六二五	太閤記(小瀬甫庵)
一六三三	犬子集(松江重頼)
一六三八	清水物語(朝山意林庵)
一六三九	*仁勢物語
一六四二	可笑記(如儡子)
一六四九	挙白集(木下長嘯子)
一六五一	御傘(松永貞徳)
一六六六	伽婢子(浅井了意)
一六六九	黄葉和歌集(烏丸光広)
一六七二	衆妙集(細川幽斎)
一六七三	出玉万句(井原西鶴)
一六七五	源氏物語湖月抄(北村季吟)
一六七八	談林十百韻(田代松意)
一六八二	*後水尾院御集
一六八四	好色一代男(井原西鶴)
	冬の日(山本荷兮)

おくのほそ道 松尾芭蕉の紀行文。元禄二年（一六八九）、芭蕉四十六歳の時の東北・北陸の旅（曾良同道）に基づき、元禄七年に成立した。栞型本一冊。井筒屋庄兵衛版。



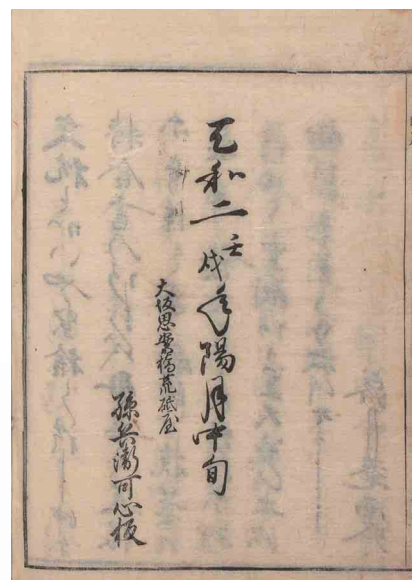
〔元禄15年(1702)〕刊

伽婢子 仮名草子。浅井了意作。『剪灯新話』などの中国文学を翻案した怪異小説集で、上田秋成『雨月物語』などにも大きな影響を与えた。大本十三巻十三冊。西沢太兵衛版。



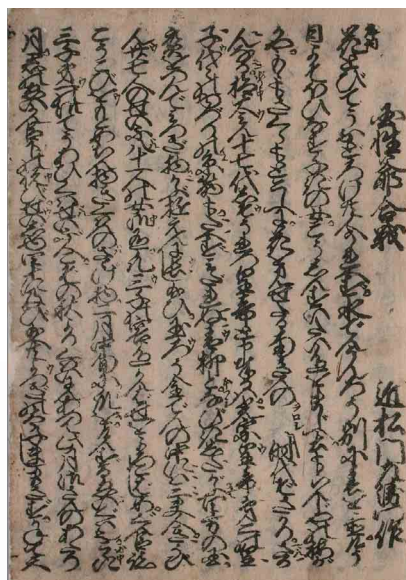
寛文6年(1666)刊

好色一代男 浮世草子。井原西鶴作・画。西吟跋（版下も）。主人公世之介の七歳から六十歳までの好色生活を一代記風に描く。大本八巻八冊。大坂の荒砥屋孫兵衛可心版。



天和2年(1682)刊

国性爺合戦 近松門左衛門作の時代物浄瑠璃。全五段。正徳五年十一月、大坂竹本座初演。中国明の忠臣鄭芝龍の子和藤内（国性爺）が明朝の再興を図るストーリー。



〔正徳5年(1715)〕刊

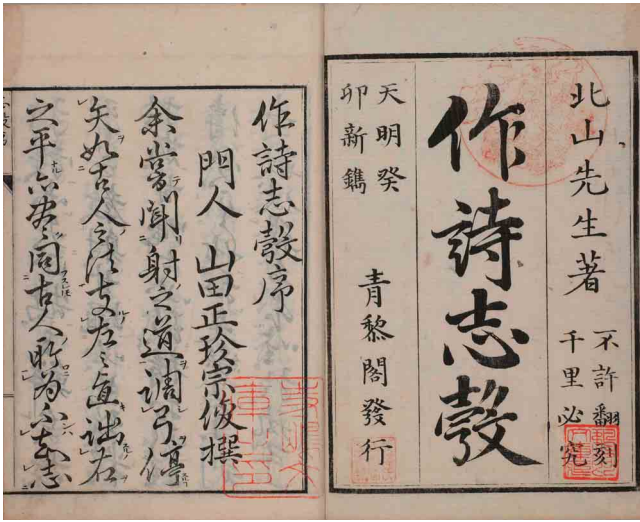
江戸時代前期

西暦	事項	*印は推定（）内は作者・撰者
一六八五	出世景清（近松門左衛門）	
一六八六	好色五人女（井原西鶴）	
一六八八	好色一代女（井原西鶴）	
一六八八	日本永代蔵（井原西鶴）	
一六九〇	笈の小文（松尾芭蕉）	
一六九〇	幻住庵記（松尾芭蕉）	
一六九一	万葉代匠記（契沖）	
一六九二	猿蓑（向井去来・野沢凡兆）	
一六九二	世間胸算用（井原西鶴）	
一六九三	*勢語臆断（契沖）	
一六九三	西鶴置土産（井原西鶴）	
一六九四	西鶴織留（井原西鶴）	
	おくのほそ道（松尾芭蕉）	
	すみだはら（志太野坡ほか）	
一六九六	万の文反古（井原西鶴）	
一七〇〇	梨本集（戸田茂睡）	
一七〇一	けいせい色三味線（江島其磧）	
一七〇二	三冊子（服部土芳）	
一七〇三	曾根崎心中（近松門左衛門）	
一七〇四	*去来抄（向井去来）	

江戸時代中期の文学

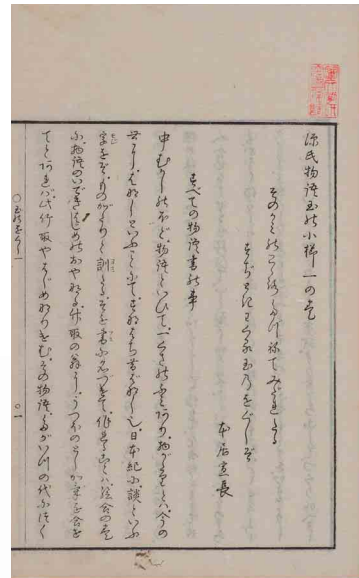
宝永頃から天明あたりまで（一七〇四～八九）、おもね十八世紀を「中期」と捉えます。宝暦・明和（一七五一～七二）を境として文化の中心が上方から江戸へと移り（文運東漸）、双方の地で多様な文芸が展開しました。本居宣長・大田南畝・与謝蕪村・上田秋成など雅俗両面にわたって多士済々、近年ではこの十八世紀こそ近世文化の最盛期とする見方も出されています。

作詩志穀 山本北山の詩学詩論書。雨森牛南校。不分巻二冊。蕪園の擬古主義を批判して性霊説を主張、その後の詩壇歌壇に大きな影響を与えた。江戸須原屋伊八版。



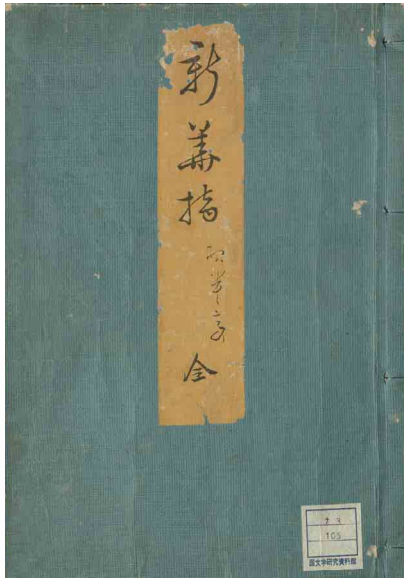
天明3年(1783)刊

源氏物語玉の小櫛 本居宣長による『源氏物語』の注釈書。寛政八年（一七九六）の成立。大本九卷九冊。総論では、高名な「物のあはれを知る」説を展開している。須受能耶蔵版。



〔寛政11年(1799)〕刊

新花つみ 与謝蕪村の俳文集。松村月溪跋・画。其角の『花摘』に倣い、亡母追善のために企図、一三五の発句と回想記一〇余章を収める。大坂塩屋忠兵衛版。



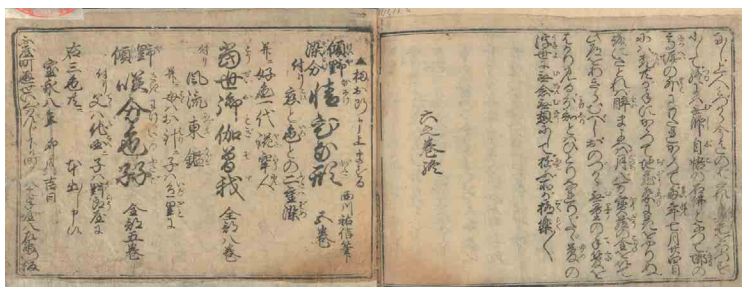
〔寛政9年(1797)〕刊

江戸時代中期

一七〇七	梶の葉(梶女)
一七一	冥途の飛脚(近松門左衛門)
一七一五	傾城禁短氣(江島其積)
一七一六	折たく柴の記(新井白石)
一七一七	古学先生詩文集(伊藤仁斎)
一七二〇	心中天網島(近松門左衛門)
一七二二	女殺油地獄(近松門左衛門)
一七二七	田舎莊子(佚斎樗山)
一七三八	見聞談叢(伊藤梅宇)
一七四二	難波土産(三木貞成)
一七四二	国歌八論(荷田在満)
一七四六	菅原伝授手習鑑(竹田出雲ほか)
一七四七	義経千本桜(二世竹田出雲ほか)
一七四八	仮名手本忠臣蔵(二世竹田出雲ほか)
一七四九	英草紙(都賀庭鐘)
一七五〇	武玉川 初編(四時庵紀逸)
一七五二	当世下手談義(静観房好阿)
一七五九	*排蘆小船(本居宣長)

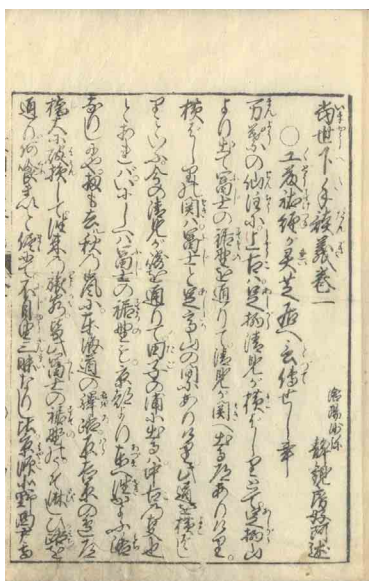
傾城禁短氣

八文字屋本の浮世草子。江島其碩作。横本の帳綴じ（横綴じ半紙本とも）六巻六冊。色道の諸相を描いた其碩の好色物の代表作。京都八文字屋八左衛門版。



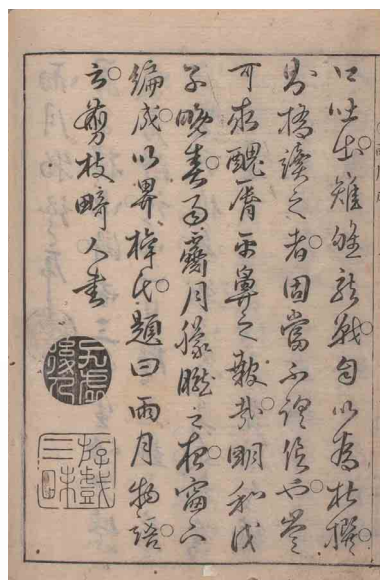
宝永8年(1711)刊

当世下手談義 静観房好阿作の談義本。半紙本五巻五冊に七話を収める。江戸の俗間の諸相を描いて、談義本流行の端緒となった。江戸大和田安兵衛・太坂屋平三郎版。



宝暦2年(1752)刊

雨月物語 上田秋成作の読本。桂屑仙画。明和五年(一七六八)成立。半紙本五巻五冊。奇談怪異を旨とした九話の短編からなる。京都梅村判兵衛・大坂野村長兵衛版。



安永5年(1776)刊

金々先生栄花夢 恋川春町作・画の黄表紙。自序。中本二巻二冊。江戸に出た野村屋金兵衛の遊興のさまを、うがちによる知的描写を交えて描く。江戸鱗形屋孫兵衛版。



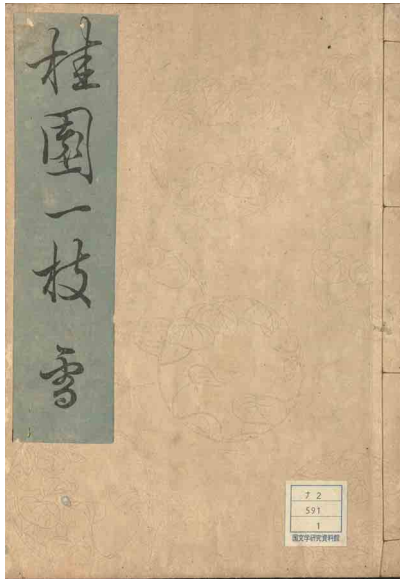
安永4年(1775)刊

江戸時代中期

西暦	事項
一七六〇	万葉考(賀茂真淵)
一七六三	根南志具佐(平賀源内)
一七六四	古事記伝(本居宣長)
一七六五	誹風柳多留初編(柄井川柳)
一七六六	諸道聴耳世間猿(上田秋成)
一七六七	繁野話(都賀庭鐘)
一七六八	世間妾形氣(上田秋成)
一七七〇	寝惚先生文集(大田南畝)
一七七三	西山物語(建部綾足)
一七七五	雨月物語(上田秋成)
一七八三	遊子方言(田舎老人多田範)
一七八四	本朝水滸伝前編(建部綾足)
一七八五	あけ烏(高井几董)
一七八七	金々先生栄花夢(恋川春町)
一七八八	作詩志鼓(山本北山)
一七八九	伊賀越道中双六(近松半二・近松加作)
一七八〇	新花つみ(与謝蕪村)
一七八一	江戸生艶気棒焼(山東京伝)
一七八二	通言総籙(山東京伝)
一七八三	鶉衣(横井也有)

江戸時代後期の文学

寛政頃から慶応末まで（一七八九～一八六八）、おおむね十九世紀を「後期」と捉えます。中心は江戸へと移り、十返舎一九や曲亭馬琴ら職業作家も出現。地方にも良寛（越後新潟）、橘曙覧（越前福井）、小林一茶（信濃長野）など、種々の個人的な作家が登場しました。ピークの文化・文政期（一八〇四～三〇）には、他に香川景樹・式亭三馬・鶴屋南北（四世）らが活躍します。



文政13年(1830)刊・明治印

桂園一枝 香川景樹の家集。山本清樹序。文政十一年（一八二八）成立。大本三巻三冊。東鳩塾蔵版。その和歌は近世和歌史上随一と評され、論難書も多く出た。京都河南儀兵衛等版。

おらが春 小林一茶の句文集。一茶五十六歳の文政三年（一八二〇）一年間の発句と文章を収める。没後二十五年の嘉永五年（一八五二）に、信州中野の俳人一人一之が自費出版した。



明治11年(1878)刊

南総里見八犬伝 曲亭馬琴作の読本。全九輯一〇六冊。柳川重信ほか画。室町時代の豪族里見家の興亡を背景に、八犬士の活躍を勧善懲悪主義のもとに描いた長編伝奇小説。



文化11年・天保13年(1814・42)刊

江戸時代後期

一七九五 傾城買四十八手(山東京伝)

一七九六 玉勝間(本居宣長)

一八〇二 源氏物語玉の小櫛(本居宣長)

一八〇五 道中膝栗毛(十返舎一九)

一八〇六 桜姫全伝曙草紙(山東京伝)

一八〇七 昔話稲妻表紙(山東京伝)

一八〇八 椿説弓張月 前編(曲亭馬琴)

一八〇九 春雨物語(上田秋成)

一八一〇 浮世風呂(式亭三馬)

一八一〇 琴後集(村田春海)

一八一〇 六帖詠草(小沢蘆庵)

一八一四 南総里見八犬伝(曲亭馬琴)

一八一八 花月草紙(松平定信)

一八二〇 おらが春(小林一茶)

一八二五 東海道四谷怪談(四世鶴屋南北)

一八二八 桂園一枝(香川景樹)

一八二九 修紫田舎源氏初編(柳亭種彦)

一八三二 春色梅児誉美(為永春水)

一八六〇 三人吉三廓初買(河竹黙阿弥)

一八六二 青砥稿花紅彩画(河竹黙阿弥)

近代

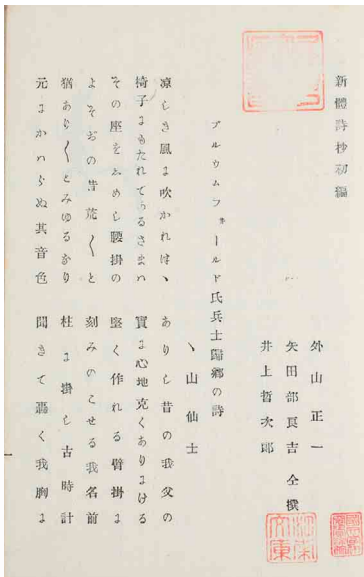
日本史では、明治以降が広く「近代」で、文学史も同様です。徳川幕府に代わった明治新政府のもと、欧米諸国に追いつくため急速な近代化が図られました。欧米の文物や思想が一挙に流入し、文学もその影響を直接、あるいは間接に受けざるを得ませんでした。ここでは、日本古典文学史の締めくくりとして、江戸時代までの文学が次第に表舞台から退き、近代文学が本格的に始動する萌しを見た、明治二十年（一八八七）頃までを紹介します。

明治時代初期の文学

明治元年から二十年（一八六八～八七）頃の文学。明治維新とともに政治制度・社会制度が大きく転換し、日本の近代が始まります。明治時代前半は古い文化と新しい文化の交代期に当たり、文学においても、江戸時代以来の系譜を引く作品と、ヨーロッパ文学の影響を受けた作品が並存していました。近代文学の始まった時期であり、古典文学の時代の終わりとも言えます。

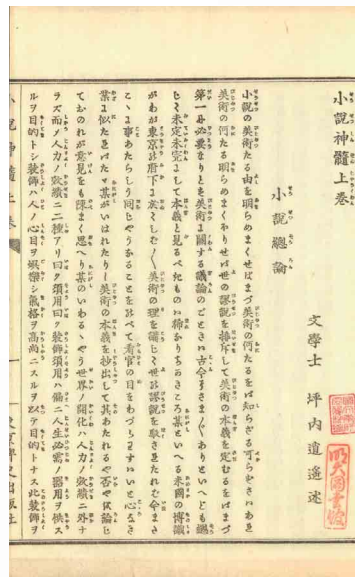


明治5年(1872)刊



明治15年(1882)刊

安愚楽鍋 飯名垣魯文作。牛鍋屋に集う人々の描写を通して、急激な開化による混乱した世相を風刺する。江戸時代以来の戯作（滑稽本など）の方法・様式によった明治戯作の代表的作品。



明治20年(1887)刊

小説神髓 坪内逍遙著。明治十八・十九年（一八八五・八六）刊。西洋の小説論の影響の下、小説において勧善懲悪を排し、人間の心情を描写すべきことを説く。

展示室のご案内

- 開室時間：午前10時～午後4時30分（入室は午後4時まで）
- 場所：国文学研究資料館1階展示室
- 入場無料

〈ギャラリートーク〉

当館講師による展示の説明を行います。

*詳細は、決まり次第、当館WEBページにてお知らせします。

発行日 2018年3月16日
編集 国文学研究資料館 企画広報室
落合博志・神作研一・恋田知子・金子馨
印刷所 株式会社 博秀工芸

明治時代初期

西暦	事 項
一八七〇	西洋道中膝栗毛 初編（飯名垣魯文）
一八七一	安愚楽鍋（飯名垣魯文）
一八七二	学問のすゝめ初編（福沢諭吉）
一八七九	高橋阿伝夜刃譚（飯名垣魯文）
一八八一	天衣紛上野初花（河竹黙阿弥）
一八八二	新体詩抄（外山正一）
一八八三	経国美談（矢野龍溪）
一八八四	牡丹灯籠（三遊亭円朝）
一八八五	当世書生気質（坪内逍遙）
一八八六	小説神髓（坪内逍遙）
一八八七	小説総論（二葉亭四迷） 浮雲（二葉亭四迷）

近代

西暦

事 項

*印は推定（一）内は作者・撰者